国立国語研究所学術情報リポジトリ

The particle no in the modificational construction of modern Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 銀珠, KIM, Eunju メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002212

『日本語科学』25(2009年4月) 23-42 [研究論文]

現代語の連体修飾節における助詞「の」

金 銀珠
(名古屋大学・グローバルCOEプログラム)

キーワード
状態性, 名詞性, 装定

要 旨

本稿では,「髪の長い人」のような主格助詞「の」が用いられる連体節の用例を分析し, 次のような傾向を観察した。「の」は連体節の述語連体形が語彙概念として無行為・無変化・無時間の性質(状態性)をもち, その形態が脱テンス・アスペクト化するにつれ使用頻度が高くなる。また, 連体形特有の用法を表す形態と親和する傾向を示す。連体節内の主語と述語の間の介在要素がほとんど見られず, 主語・述語から成る非対格構造との親和性を見せる。文としての自立性をもつ連体節には表れにくく, 被修飾名詞の意味実質性が強い構造で用いられる。このようなことから「の」は, 述語が「状態性述語」であることを示し, 連体修飾部と被修飾名詞が状態・属性とその帰属対象の関係にあることを示すものと論じた。さらに, 状態性述語の特徴は名詞述語の性質と捉えられ, その意味において「の」は述語連体形の名詞性に係るものであると論じた。「の」は述定の構造で表れるが, その内実は述語連体形と装定の関係を成している。

1. はじめに

現代日本語の連体修飾節(以下, 連体節と略)においては, (1)(2)のように主語を表示する「の」「が」の2種類の助詞が使用されることが知られている。

(1) a. 雨の降る日　　b. 髪の長い人

(2) a. 雨が降る日　　b. 髪が長い人

(1a, b)のような連体節内で主語を表示する「の」は, (2a, b)のような「が」で主語を表示するものと比較関連付けて説明されてきた。特に, 1970年代以降は, 生成文法を中心に「ある種の埋め込み文の中で主語を表す「が」が任意に「の」と交替する」という, いわゆる「が/の交替」論(Harada(1971:26))として,「の」が容認される一般的な条件が考えられてきた(Harada 1971, 1976; 井上 1976; Miyagawa 1993; Watanabe 1996; Hiraiwa 1998; Ochi 2001など多数)。例えば, Harada(1971)において「の」で繋がれる主語と述語の間に介在要素をまったく許さないか, 一つまで許すグループがあること, Watanabe(1996)では介在要素にヲ格が表れると「の」の許容度が下がること, Hiraiwa(1998)では述語が連体形であることにより「の」が許容される場合がある, というようなさまざまな指摘がなされてきた。しかし, 従来の研究においては,「の」が使用される連体節そのものの特徴を定量的に観察したものはほとんど見当たらず, 個々

に観察された諸特徴がどのように有機的に関連しているのかに対しても十分な考察がなされていないように見られる。従来の研究においては内省による考察が主に行われていたが，「の」の使用には個人差がある上に「が」より使用される範囲が狭いことが知られており，このような量的な制限と個人差がある文法現象ほど，実証的な観察が優先的課題であろうと考えられる。最近では，南部（2005）がコーパス資料を用いて連体節における「の」に関する統計的データを示しているが，南部（2005）では現象の記述にとどまっており，諸現象が何を意味するのかということについては論じられていない。本稿は，「の」が用いられる連体節に見られる諸現象がそれぞれ無関係に存在する個別の要因であると考えるより，観察された諸現象を有機的に関連付ける構文的理由について考えようとする。その際，「の」本来の名詞修飾の文法機能に注目して，「の」が用いられる連体節の傾向を考察する。「が／の交替」論のように「の」の価値を「が」と比較し関連づけること自体は問題ではないが，「が」の範囲内に「の」が回収されることで「の」自体の文法機能との関連という問題が手つかずのまま残されている。歴史的にみれば，連体節における「の」は千年以上もの間生き続けているものであるから，「が」から「の」に「交替」した現象とは考えにくく，「の」自体の文法機能からこの現象を考える必要があると思われる。

本稿は，まず現代語の連体節における「の」の用例を定量的に観察し，「の」の意味構文的機能を明らかにする。また，なぜ連体節の中で「の」が現れるのかという問題に対し，「の」自身の性質から観察された諸現象が起きているものとして論じる。

2. 調査

本節では，現代語の連体節における「の」の使用状況を連体節内の述語と被修飾名詞の各部分に見られる傾向から調査分析する。分析は，1970年代～1990年代までの現代小説4冊から「雨の／が降る日」（A{の／が}BC）のようなAとBが主述関係を成し，名詞Cにかかっていく例を抽出し，「の」の使用に関する要因を考える。用例中，「富士山の雪をかぶっている光景」，「磯辺の酔った顔」のように主語名詞Aが被修飾名詞Cに直接かかっていくいわゆる擬似関係節における「の」の例は，修飾構造が異なるため除外した。また，比較の公平性を考慮し，「の」「が」のどちらか一方が表れにくい例は除外した[1]。資料は，五木寛之『白夜草紙』（1971，文芸春秋），宮本輝『星々の悲しみ』（1984，文春文庫），連城三紀彦『恋文』（1987，新潮社），遠藤周作『深い河』（1996，講談社）である（以下，小説名は頭文字で表記）。用例は「の」「が」のどちらか一方が表れにくい例以外はすべてを対象とし，延べ1,143例で，「の」の用例が572例，「が」の用例が571例である。

2.1. 述語連体形Bの部分

述語Bの部分は，語のタイプと形態との関連を見るため，述語のタイプ（形容詞か自動詞か他動詞か）による違い，形態（タ形かル形かテイル形か等）による違いに分ける。また，先行研究において，「の」の使用と連体節内の主語と述語の間の介在要素との関連が指摘されているので，この点についても考察する。

2.1.1. 述語のタイプによる分布

まず，述語を形容詞と自動詞，他動詞とに分けて「の」「が」の分布の違いを見る。自動詞，他動詞の分類はヲ格を取るか否かで判断したが，細部については三上（1972）を参考にした[2]。

表1　述語のタイプによる分布

	形容詞		自動詞		他動詞	
	の	が	の	が	の	が
恋	31	5	44	97	9	73
	86.1%	13.8%	31.2%	68.7%	10.9%	89.0%
白	64	9	57	73	10	45
	87.6%	12.3%	43.8%	56.1%	18.1%	81.8%
深	52	6	86	62	17	77
	89.6%	10.3%	58.1%	41.8%	18.0%	81.9%
星	67	1	111	81	24	42
	98.5%	1.4%	57.8%	42.1%	36.3%	63.6%
合計	214	21	298	313	60	237
	91.0%	8.9%	48.7%	51.2%	20.2%	79.7%

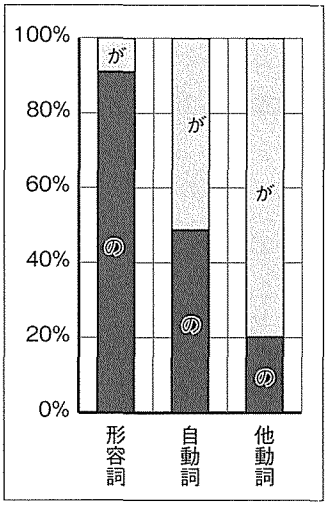


図1

表1および図1をみると，形容詞は全235例中（内，形容動詞16例を含む）214例に，「額の広い女性」（深18p），「化粧の濃い顔」（白57p）のように「の」が用いられ，91.0%の高率を示している（図1は表1をグラフ化したもの）。また，「雪の降る冬」（星73p），「亭主が死んだ晩」（恋71p）のような自動詞の場合は，「の」と「が」が同程度用いられている。「牛がはんでいる牧場」（深93p），「美木子が作った料理」（恋161p）のような他動詞の場合は「が」がよく用いられ，「の」の使用率は20.2%にとどまっている。合計で「の」が使用されている比率の高い順番を示すと，

形容詞（91.0%）＞自動詞（48.7%）＞他動詞（20.2%）

のようになる。この順番は個々の資料においても同じである。形容詞の場合に「の」の使用率が一番高く，自動詞，他動詞になるほど「の」の使用率が徐々に減っていくということは，述語のタイプが「の」の使用率に影響していることが考えられる。このことを述語の性質という側面から考えると，まず，述語が形容詞の場合に「の」の使用率が91.0%に上るということは，形容詞がもつ性質を基準に「の」の使用率を考えてみる必要がある。形容詞は，意図的な行為や変化の意味をもたない時間を超えた属性概念であり，このことから，形容詞は無行為（意図的な動作主がない）・無変化・無時間性を特徴とする語類と見なすことができる[3]。形容詞のこのような性質を基準に，自動詞，他動詞を考えてみると，自動詞の多くは意図的な行為をもたない語類であり，この点は形容詞と類似する。自動詞は「コクのある珈琲」（星69p），「雨の降る暗い戸外」（星108p）のような意図性のない非対格自動詞の例（611例中517例）と「お父さんが結婚するまえ」

（恋 174p），「私が時たま立ち寄る酒場」（白 33p）のような意図的な行為を表す非能格自動詞の例（611 例中 94 例）に分けることができる（影山 1999, 2001）。表 2 は，意図的な行為の有無から述語が自動詞，他動詞の場合の「の」「が」の分布をまとめたものである（図 2 は表 2 をグラフ化したもの）。自動詞の中で，行為を表さない非対格自動詞の場合だけをみると，表 2 のように，「の」の使用例が 56.0%を占める。一方，非能格自動詞の場合は，「の」の使用例は 8.5%（94 例中 8 例）に減少する。非能格自動詞は意図的な行為を表すという点で他動詞と共通し，非能格自動詞と他動詞を合わせた語類では，「の」の使用率は 17.3%にとどまる[4]。

表 2　行為の有無による分布

	非対格自動詞		他・非能格自動詞	
	の	が	の	が
恋	41	64	12	106
	39.0%	60.9%	10.1%	89.8%
白	56	56	11	62
	50.0%	50.0%	15.0%	84.9%
深	85	44	18	95
	65.8%	34.1%	15.9%	84.0%
星	108	63	27	60
	63.1%	36.8%	31.0%	68.9%
合計	290	227	68	323
	56.0%	43.9%	17.3%	82.6%

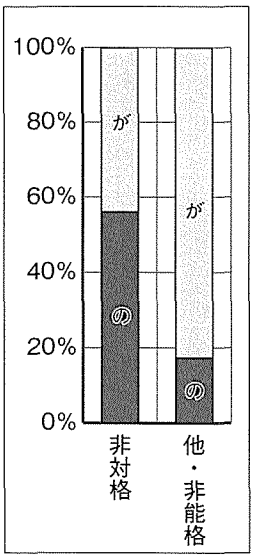


図 2

ここで，前記の「の」が使用されている比率の高い順番を行為の有無という側面からやや詳細に示すと，

形容詞（91.0%）＞非対格自動詞（56.0%）＞他動詞＋非能格自動詞（17.3%）

のようになる。「の」が用いられる全 572 例の構成では，形容詞が 37.4%（214 例），非対格自動詞が 50.6%（290 例），他動詞と非能格自動詞を合わせたものが 11.8%（68 例）の割合であり，「の」の後の述語の多くが形容詞か非対格自動詞で占められている。

形容詞は無行為・無変化・無時間の性質をもつ語類であると整理した。形容詞がもつこのような性質を，「状態性」と呼ぶことにする。このような性質を基準にすると，他動詞と非能格自動詞は，動作主を項としてもち，時間軸上に展開する行為を表しており，対象物や主体の変化を示す性質を有する。特に他動詞は，行為，変化，時間的展開性をもつ点から状態性の対極にあるものである。一方，非対格自動詞は，意図的な動作主がないため行為を表さず，「ある」「いる」のような時間的に展開しないものと「吹く」「残る」のような変化の意味をもつ語類で構成されている。影山（2001：8）によると，非対格自動詞がもつ変化の意味は，「通常，変化は何らかの結果を伴うから，＜変化＞は＜状態＞と連動することが多い」としている。実際，次節でみるよ

うに，非対格自動詞の中で変化の意味をもつものは，特定の形態が接続することによって，状態の意味を強めることができる。非対格自動詞は行為を表さず，「状態」か「状態」に転じやすい「変化」の意味をもち，他動詞や非能格自動詞より状態性がより強い。したがって，本節の述語のタイプによる「の」の使用率の結果は，無行為・無変化・無時間の「状態性」が強いほど「の」の使用率が高くなっていると解することができる。

なお，述語連体形Bの部分については，1970年代～1990年代の現代小説5冊を対象とした金（2002）の調査で，アスペクト性による動詞分類の観点から「の」の後の述語動詞には時間軸上で展開しない語類が多く分布することを報告した。

2.1.2. 述語の形態による分布

次に，述語の形態による「の」「が」の分布を見る。形容詞述語の場合，前節でみたように主語表示にはほとんど「の」が用いられ，述語形態も安定しているので（以下記述），動詞述語を中心に考察する。動詞の形態は，ル形，タ形，テイル形に分け，タ形とテイル形をさらに二つに細分する。ル形は，基準時と同時の動作や状態を表すものである。タ形は以前を表すものと，状態を表すもの，テイル形は動作の継続進行を表すものと，状態を表すものの二つである[5]。なお，「話していた」のような「～ていた」はテイル形として扱う。これらの形態以外は，「その他」形としてまとめる。「その他」形は，受身や使役形，アスペクト，やりもらい等を表す種々の補助動詞，「鳴りはじめる」「おわりかける」のような，動詞連用形につづく複合動詞の後項動詞（姫野1999）等が接続したものである。

(3) 灯のうるむセーヌ河（深108p）　　—ル形（同時）
(4) 妻が消えたこと（深26p）　　—タ形（以前）
(5) 札束の入った封筒（恋27p）　　—タ形（状態）
(6) 常さんが唄っている軍歌（恋123p）　　—テイル形（進行）
(7) 松が立っている森（深95p）　　—テイル形（状態）
(8) a. 彼女が探っていく本（深34p）　　—「その他」形
　　b. クロの存在が与えてくれた種（深123p）—「その他」形

表3は述語の形態による「の」「が」の分布を示したものである。図3は表3をグラフ化したものである。まず，形容詞述語は全用例235例中226例が「閉店の遅い店」（深62p），「背の低い外人青年」（深149p）のような現在形をとっている[6]。「の」は形容詞現在形の用例226例中211例に用いられ93.3%を占めており，動詞述語の形態による分布と合わせて最も高い使用率を示している。次に，動詞述語の形態では「の」は状態を表すタ形と，基準時と同時の動作や状態を表すル形に高い使用率を示している。タ形と同じ状態を表しているテイル形や動作の継続進行を表すテイル形，以前を表すタ形，「その他」形は「が」が高い使用率を示している。述語の形態による分布を「の」の使用率が高い順で示すと，次のようである。

形容詞現在形（93.3%）＞　状態タ形（90.9%）＞　同時ル形（60.2%）[7]＞　状態テイル形（25.3%）＞　以前タ形（19.8%）／進行テイル形（18.7%）＞　「その他」形（13.0%）

表3　述語の形態による分布

	形容詞現在		同時ル		以前タ		状態タ		進行テイル		状態テイル		その他	
	の	が	の	が	の	が	の	が	の	が	の	が	の	が
恋	30	5	21	30	8	58	17	4	0	18	2	15	3	34
	85.7%	14.2%	41.1%	58.8%	12.1%	87.8%	80.9%	19.0%	0%	100%	11.7%	88.2%	8.1%	91.8%
白	64	4	38	23	4	30	18	3	2	13	2	17	3	30
	94.1%	5.8%	62.2%	37.7%	11.7%	88.2%	85.7%	14.2%	13.3%	86.6%	10.5%	89.4%	9.0%	90.9%
深	49	4	46	26	14	53	29	1	6	22	4	12	3	17
	92.4%	7.5%	63.8%	36.1%	20.8%	79.1%	96.6%	3.3%	21.4%	78.5%	25.0%	75.0%	15.0%	85.0%
星	67	1	65	33	13	21	26	1	7	12	11	12	9	39
	98.5%	1.4%	66.3%	33.6%	38.2%	61.7%	96.2%	3.7%	36.8%	63.1%	47.8%	52.1%	18.7%	81.2%
合計	211	15	170	112	39	157	90	9	15	65	19	56	18	120
	93.3%	6.6%	60.2%	39.7%	19.8%	80.1%	90.9%	9.0%	18.7%	81.2%	25.3%	74.6%	13.0%	86.9%

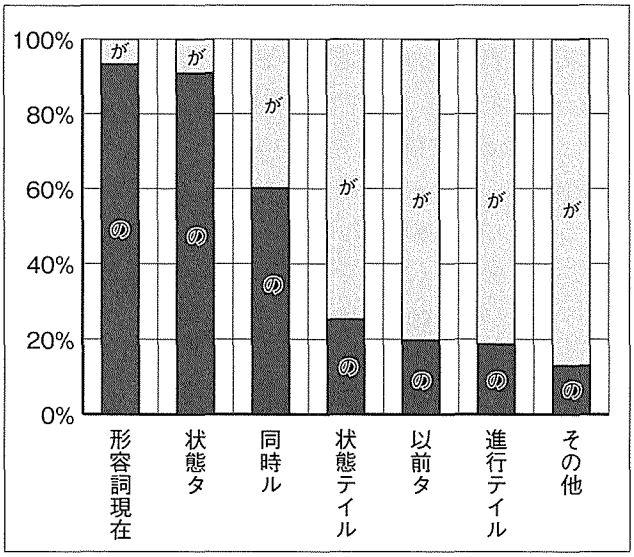


図3

「の」の使用率が高い順番で考えてみる。形容詞現在形は，形容詞がアスペクト表現の基本となる時間的展開がないので，アスペクトとは無関係な形態である。また，時と離れた属性を表すので基準時と同時のテンス的意味が弱い。形容詞現在形の次に「の」の頻度が高い状態を表すタ形は，「頬骨の突き出た顔」（星144p），「彼女の写真のついた表紙」（深34p）のような例で，述定では「突き出ている」「ついている」のように「～ている」形で表れ，連体形特有の用法を示すものである（工藤1983，寺村1984，金水1994，高橋1994）。このようなタ形には基準時より以前の意味も変化の意味も感じられず，時制的な解釈はできない。これは，「一年前頬骨の突き出た顔」「昨日彼女の写真のついた表紙」のような特定の時点を表す副詞の修飾を受けられないことからも窺える。また，変化結果の持続という完了の意味ももたず，アスペクト性をもたない。タ形の次に「の」の頻度が高い，基準時と同時の動作や状態を表すル形は，「特徴のある顔つき」（星128p），「女のいるバー」（白30p）のような状態動詞，「陽のさしこむクルトル・ハイム」（深102p），「風の吹く坂道」（白32p）のような自然現象の非意志的な動きを表す現象動詞（工藤1995），「虫のすだく庭園」（深181p），「大津の住むこのヴァーラーナスイ」（深188p）のような動詞が表す事態が時間的な幅のあるものが大多数である。このようにル形の例は，状態動詞以外は，基準時と同

時の動作の進行を表すものである。高橋（1994：66）によると，このようなル形は積極的に進行を表すのではなく，進行しつつある動作を一時点で切って，動作があることだけを示しており，テイル形よりアスペクト性が弱いものであるとされる。これは，前記の例を「陽がさしこんでいるクルトル・ハイム」「大津が住んでいるこのヴァーラーナスイ」にすると，現在進行中の意味が強くなることからもわかる。また，このル形は主節を基準に現在の意味しかもたないため，テンス性も弱いとされる（高橋 1994）。なお，述定では，通常，「陽がさしこんでいる」「虫がすだいている」のように「～ている」形で表れ，状態を表すタ形と同様，連体形特有の用法である[8]。また，「の」が用いられる状態を表すタ形と，基準時と同時の動作や状態を表すル形は，述語がほぼ非対格自動詞で，「の」が用いられる非対格自動詞の場合，ほとんどが，この両形態の例で占められている（290 例中 247 例）。

「の」と「が」の頻度が逆転する，状態を表すテイル形の「歌が載っている頁」（恋 33p），「裸電球がぶらさがっているその入口」（白 15p）のような例は，意味的には状態を表しているが，テイル形自体が本来アスペクト形式で，基準時で一定の状態にあることを表すアスペクト的意味をもつ[9]。以前のタ形が接続した「M 銀行が配った黒革の小さな手帳」（深 29p），「妻が自分にくれた大切な遺品」（深 36p）のような例は動作主による行為を表し，テンス性が強く，基準時以前という解釈になる。テイル形が動作の進行を表す「運転手が怒鳴っている場面」（星 9p），「ぼくと草間が運んでいる紙包み」（星 31p）のような例は，アスペクト専用のテイル形式を伴い，基準時と同時の動作主による行為を表すもので，アスペクト性が濃厚である。「の」の使用率が最も低い「その他」形は，受身や使役，動作の起点や到達点などを表す専用のアスペクト動詞が接続した「私の徒食生活が苦しくなりはじめた頃」（白 120p），「その冬が終わりかけた頃」（白 30p），「ぼくが捜し出そうとしていたこと」（星 56p）のような例，やりもらい表現の「彼女がすすめてくれた椅子」（白 130p），変化を表す専用形式が接続した「獲物が息たえだえになる瞬間」（深 78p）のような例で，動詞本来の動作や変化の局面が示されるアスペクト性，動作主による意図性が強い。また，動詞だけが表せるヴォイス，やりもらい表現を表していることで，動詞らしさが濃厚に発揮されている。

以上，述語動詞の形態による「の」「が」の頻度の違いにおいて，述語動詞が表す時間的位置や局面が時間を超えた意味になるほど（脱テンス・アスペクト），「の」の頻度が高く見られることがわかる。前節で述べた無行為，無変化，無時間性という状態性の基準からすると，これは，無時間性に該当する。また，「の」の使用頻度には，連体形特有の用法と結びついた形態という要因が関わっていることが窺える。同じ状態を表す用法でも「お金の入った封筒」のタ形が「お金の入っている封筒」のテイル形より「の」の使用率が高いことからもこのことは裏付けられる。また，動作の進行を表す用法でも「風の吹く坂道」のル形が「風の吹いている坂道」のテイル形より「の」の使用率が高いことからも同様のことが言える[10]。「の」の頻度が高い，このようなタ形やル形の用法は，現代語の連体形特有のものであり，「の」は連体形特有の用法を表す形態と親和する傾向を見せている。

2.1.3. AとBの間の介在要素の有無

次に，主語名詞Aと述語連体形Bの間の介在要素についてみる。先行研究では，主語名詞と述語連体形の間に介在要素があると「の」が表れにくいこと（Harada 1971，1976），特に，「[ジョンの本を買った] 店」のようにヲ格が介在すると，「の」が表れにくいことが指摘されている（Watanabe 1996）。実際，「の」の全用例572例中，介在要素があるのは次の5例のみである。

(9) マスカラの黒く滲んだ目（恋 202p）
(10) 看板の低く掲った店（恋 216p）
(11) 夕日の強く残っている街（深 95p）
(12) 構治の全く知らない角度（恋 226p）
(13) 人間の大勢ひしめいている所（星 199p）

注目されるのは，上の5例にはみな副詞成分が介在していることである。これらは，実質的に主語名詞を限定する（13）を除けば，述語動詞の意味そのものと関係しており，両者の意味的結束性が強い。このような副詞成分は，大島（1999：157）が述べるように，介在要素としてではなく，述語と一体化した構造—[[主語名詞] [副詞　述語]] として把握されやすいものであると考えられる。また，上の5例の内，同じ作家（恋文の作家，連城三紀彦）が3例を占め，これが作家の個性であるとすれば，一般的には，この位置に他の介在要素が来ることはまれであるのではないか。一方，「が」は介在要素有りが308例，無しが263例である。「が」と述語との間には，「夫が窓ガラスに描き遺していった桜の花片」（恋 30p），「文子が自分の名義でかけておいてくれた生命保険」（恋 62p），「彼が友だちから仕込んだ巴里散歩の知識」（深 88p），「私たちが一緒に住んでいた頃」（白 39p）のように，多様な格成分，副詞成分が介在している。このことは「が」が「の」と違って，主語と述語の間に介在要素を排除するということがないことを示している。しかし，「の」は節内に主語と述語だけが現れ，介在要素を排除する傾向を示している。「の」のこのような傾向は，2.1.1節で観察した「の」の後の述語に形容詞や自動詞（非対格）が大半を占めていたこととも関わっていると考えられる。連体修飾部が主語・述語から成る構造を維持しようとすると，「雨が降る」「髪が長い」のような，述定が主語・述語から成る形容詞や自動詞の例が適していると言える。

2.2. 被修飾名詞Cの部分

本節では，被修飾名詞Cの性質による「の」「が」の使用傾向について検討する。被修飾名詞は，形式名詞と普通名詞に分ける。形式名詞の規定は井手（1967）を参考にした[11]。また，形容詞述語の場合は「の」が大多数を占めるため（2.1.1節），動詞述語を中心に考察する。被修飾名詞の性質による「の」「が」の分布を示すと，**表4**のようになる。**図4**は表4をグラフ化したものである。

(14) a. 私が会った少女（白 144p）　—普通名詞
　　b. 葉の繁った大木（星 62p）　—普通名詞

(15) a. 彼女が畳んで置いたこと（白 35p）　　—形式名詞
b. 電話がこなくなった時（恋 44p）　　—形式名詞

表 4　被修飾名詞の種類による分布

	普通名詞		形式名詞	
	の	が	の	が
恋	41	58	12	112
	41.4%	58.5%	9.6%	90.3%
白	61	51	6	67
	54.4%	45.5%	8.2%	91.7%
深	92	68	11	71
	57.5%	42.5%	13.4%	86.5%
星	112	42	23	81
	72.7%	27.2%	22.1%	77.8%
合計	306	219	52	331
	58.2%	41.7%	13.5%	86.4%

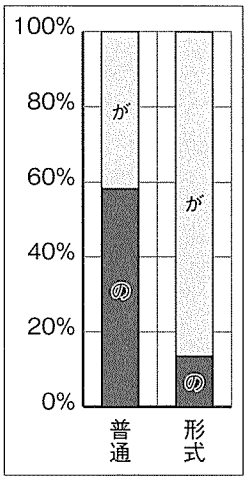


図 4

表 4 をみると，「の」の使用率は普通名詞の場合は「が」より多く，58.2%使用されているが，形式名詞の場合は 13.5%に減少する。被修飾名詞に形式名詞が用いられる全 383 例は，タイプにより四つのグループに分けられる。①「有吉が呟いたとき」（星 55p），「物心がついた頃」（星 71p）のような「時」の意味を表す語の例が 147 例，②「人間が餓死すること」（白 27p），「今現在私が敵意を抱いていること」（白 138p）のような「こと」の例が 131 例，③「顔が入る分」（星 34p），「風が吹いたせい」（白 54p）のような様々な形式名詞の例が 71 例，④「抑制力のある方」（深 31p），「信頼のできるもの」（恋 149p），「手のとどかないところ」（白 140p）のような人や物，場所を表す例が 34 例である。①～④における「の」「が」の使用率を見ると，①は 138 例(93.8%)，②は 121 例（92.3%），③は 65 例（91.5%）に「が」が用いられ，①～③の場合には，「が」が 9 割以上を占める。ところが，④のような人や物，場所を表す場合に限り，「の」が 79.4%（34 例中 27 例)の使用率を占める。④は，形式名詞の中でも意味実質性が強い語類である。これは，④のタイプの連体節が，寺村（1992）の連体修飾の分類で「内の関係」に入ることからも確認される。上記の④の例は，「その方（かた）には抑制力がある」「それは信頼ができる」「そこには手がとどかない」のように「内の関係」に変換できる。「内の関係」にある被修飾名詞は，連体節の内部の構成要素として節の内容に直接関わるもので，寺村（1992）では形式名詞ではなく実質名詞とされる。このような実質性の強い例を除くと，形式名詞の場合に「の」が用いられる割合は，7.1%（349 例中 25 例）にとどまる。被修飾名詞が意味実質性をもたない場合，「の」はほとんど用いられない傾向にあると言える。

なぜ，「の」がこのような傾向を見せるのか。上記の結果から，厳密に言うと，被修飾名詞が形式名詞ということより，連体修飾部と被修飾名詞が成す連体構造が「の」の使用率に影響して

いることが予想される。連体構造面からすると，形式名詞は井手（1967：42）が「連体修飾する先行の語句の内容がいかなる範疇に属するものについて述べたものであるかを言い定めるという働き，つまり，範疇を規定する機能をもつものといわねばならない。」と述べるように，節の内容に対して一定のカテゴリーを与える機能を果たす。すなわち，（15a）を「彼女が畳んで置いた〈こと／とき／場合〉」と変換できるように，形式名詞は連体節の内容がどのカテゴリーに属するかを述べるパラメーターとして機能しているに過ぎず，節内部の内容には直接関わらない。このことから，寺村(1992:267)では，形式名詞を被修飾名詞が連体節の内容の構成要素ではなく，修飾部の外から加えられているとし，「外の関係」の連体修飾構造の一部として捉えている。「内の関係」と「外の関係」の違いによる「の」「が」の使用率をみると，連体節が「人間が餓死すること」（白 27p），「僕が寝た後」（恋 18p）のような「外の関係」にある場合は，「の」は 7.1%（389 例中 28 例）の頻度を示す。一方，「冷房のきいた映画館」（星 94p），「私が差し出した十円銅貨四枚」（白 15p）のような「内の関係」の場合は，「の」の使用率が 63.5%（519 例中 330 例）に伸び，連体節が「外の関係」にある場合に「の」の使用率の減少が著しい。なお，述語が形容詞の場合は，全 235 例中 213 例が「内の関係」，22 例が「外の関係」であり，そもそも「内の関係」が「外の関係」を大きく圧倒している。形容詞の場合，「の」の使用率は「内の関係」の場合が 97.1%（213 例中 207 例），「外の関係」の場合が 31.8%（22 例中 7 例）を示しており，「外の関係」にある場合「の」の使用率が減少する傾向は動詞述語と同様である[12]。「外の関係」の連体修飾部というのは寺村（1992:267）で「内の関係」より文としての自立性が高いとしているように，「内の関係」と違って被修飾名詞が連体修飾部の構成要素ではなく，節内の述語に必要な補語が欠けておらず，それ自体で文に匹敵するような自立性を有していると考えられる。したがって，「外の関係」の連体節では，動詞が文末の述語と近い性質をもち得ると考えられ，このことが「の」の使用率の低下に反映されているものと考えられる[13]。以上，「の」は被修飾名詞の意味実質性が強い連体節で用いられ，連体修飾部が文としての自立性―述定性―が高い場合には頻度が落ち，反対に「が」が増加する傾向を示していると整理できる。

3. 考察―「の」の機能―

本節では，2 節までの観察をもとに，「の」の機能について検討する。「の」が用いられる連体節の特徴は，まず，述語の部分にある。連体節内の述語が無行為・無変化・無時間の性質をもつほど，「の」が用いられる比率が高い。ここでは，このような性質をもつ述語を「状態性述語」と呼ぶことにする。「の」が用いられる状態性述語は，「言いようのない苦痛」（深 22p），「気の強い姑」（恋 60p），「名の知れた存在」（星 124p）のように主語と述語の間に他要素が介在せず，一体になっているものが多く，両者の意味結束性が強い。状態性を示す場合，頻度を表す副詞の使用や一般的な事実を述べるなどの方法もあり得る。しかし，「の」が用いられる連体節はそのような方法によらず，述語連体形の語彙概念に，直接，状態性をもつものが来る傾向を示している。影山（1999，2001）で示されている語彙概念構造，項構造がこのような事情を捉えやすいので，これによって，2.1 節で考察した述語のタイプを示すと，次のようになる[14]。

(16) 形容詞	＜顔色が＞悪い	(＜y＞)	y BE AT-z
(17) 非対格自動詞	＜川が＞ある	(＜y＞)	y BE AT-z
	＜油が＞にじむ	(＜y＞)	BECOME [y BE AT-z]
(18) 非能格自動詞	運転手が怒鳴る	(x ＜ ＞)	x ACT
(19) 他動詞	彼女が＜千円札を＞出す	(x ＜y＞)	x CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]

＜ ＞内の要素 y は内項で，文が描写する対象物である。また，述語動詞と一番密接な関係にあり，動詞と結びついて一体化しやすく，BE の主語でもある。x は外項で動作主である。「の」の後の述語連体形に集中する形容詞や非対格自動詞は，例（16），（17）のように，動作主の x 項をもたず，対象物である内項の y 項だけで構成され，語彙概念に状態［y BE AT-z］を共通の意味としてもっている。一方，「の」の後に来ることが少ない非能格自動詞や他動詞は，例（18），（19）のように，動作主の x 項をもち，他動詞は対象物 y に変化を及ぼす。すなわち，語彙概念構造，項構造の側面からみると，「の」は①状態［y BE AT-z］を語彙概念としてもち，②動作主の外項をもたず，内項だけで構成される構造で現れやすい傾向を示している。このような構造を「非対格構造」と呼ぶことにする。非対格構造の状態性述語と結びつきやすい傾向は「が」には見られない「の」特有の現象であり，「の」が次に来る述語の性質に制限をかけているとみることができる。「の」が用いられる連体節の意味構造を見ると，概略，次の三つのタイプに分けられる。

（20）顔色の悪い女　　：被修飾名詞が「人」
（21）油のにじんだ白衣　　：被修飾名詞が「物」
（22）灯のうるむセーヌ河　：被修飾名詞が「場所」

「の」が用いられる連体節全 572 例中 428 例が（20）～（22）のように被修飾名詞が人[15]か物か場所の例で占められている。これらの被修飾名詞は，連体節で述べられる状態又は属性が帰属する対象である。「の」が使われる連体修飾部と被修飾名詞との関係は，このような【【状態・属性】と【その帰属対象】】の関係を典型とし，連体修飾部は被修飾名詞の存在の仕方に関わる。被修飾名詞が人か物か場所の例を除いた残り 144 例中 105 例が，「木々や土の臭いのする涼風」（深 173p），「風の強い土曜日の午後」（白 46p）のように被修飾名詞が意味実質性をもち，具体的に認知できる特定の対象を示している。被修飾名詞にこのような特定の対象を表す例が多いのは，連体節中の状態性述語の受け止め方によるものと考えられる。すなわち，連体節で表現される状態や属性は，それが帰属する何かの「対象」が必要となるが，その帰属対象として被修飾名詞がターゲットになっていると考えられる。被修飾名詞に人や物や場所を表す例が多く見られるのは，これらが属性が帰属できる具体的な対象になりやすいためであろう。形式名詞の中でも人や物や場所を表す場合のみ「の」の使用率が高いのは，同じ理由から説明できる。また，被修飾名詞に意味実質性をもたない形式名詞が来ることが少ないことも，同様の理由から理解できる。「の」が必要とする意味関係を成すには，属性が依拠する対象が必要であるが，形式名詞の多くは属性が依拠する物や場所等を表すことはできず，連体節で表現される事柄を束ね，一定のカテゴリーを提示する役割をする。これが「の」の使用率が低い理由であろうと考えられる。以上の

ことから「の」の機能は，述語が状態性述語であることを示し，被修飾名詞が修飾部の属性・状態主であることを示すものと考えられる。

「の」が用いられる周辺部の例には「妻の使ったもの」（深 32p），「浅子のたてた花」（恋 83p）のような，動作主を項としてもち，述語が行為を表すものがある。本稿では，金水（1994）が提示する「状態の焦点化」という考え方を援用し，これらは語彙概念構造・項構造の側面から「の」が述語動詞の意味を状態性述語へと派生させていると考える[16]。金水（1994：40）は，「曲がった釘」「ゆでた卵」「酢でしめた蛸」のような本来動作性をもつ語が名詞修飾でタ形をとり，状態性をもつ述語として派生するプロセスを，「状態の焦点化」という視点から考察する。「状態の焦点化」とは，「状態を前景化し，出来事を背景化すること」を指し，動詞の意味が状態としての資格を与えられることにより，動詞本来の概念構造とは別に，状態性述語としての概念構造・項構造が派生されるとする。金水の論は，連体節の「の」の説明にも有効であろうと考える。連体節における「の」の場合，「の」の機能により連体節の述語に状態性述語としての資格が付与されると，先に示した①状態［y BE AT-z］をもつ概念構造，②動作主をもたず，対象物の y 項で構成される非対格の項構造に派生する。また，述語連体形の意味が状態［y BE AT-z］の資格をもつことにより，連体修飾部全体が属性表現としてみなされる。これによって，動作主の外項 x は背景化する。状態性述語として派生した述語連体形は，格成分を必要としない。格成分は，動詞が語彙概念として本来もつ項であるが，「の」によって状態性述語へと派生された述語は格を受け取る資格がない。よって，「妻」や「浅子」は動作主としての主格ではなく，被修飾名詞の「もの」，「花」も動作を受ける対象ではない。前者は，状態・属性を表す連体修飾部の一部分として，後者は，その帰属対象として派生していると考えるのである。

4.「の」による装定 —述語の名詞性—

では，なぜ「の」が用いられる連体節の述語には 2 節で観察したような諸特徴が現れるのか。この問題と関連して，まず，連体節の「の」が直接係るのは被修飾名詞ではなく，述語連体形であることを確認したい。まず，助詞「の」の用法の中で，「の」の後の述語連体形に状態性述語が必要とされるのはどのような場合であるのかを検討する。意味的な修飾関係は別にして，「髪の長い女」のような「名詞・の・連体形・名詞」（以下，A の BC と略）の構造をもつ名詞句には，次の（23a,b,c）の三つのパターンがある。

（23）a. 私の，昨日一緒に夕飯を食べた友達
　　b. トウホクさんの，ベッドに小さく横臥して酸素の量を自分で調節しながら，一日中細かい息づかいをつづけている姿　（星 215p）
　　c. 頭のいい連中

（23a）は一般的な所有格の「の」で「A の C」（私の友達）の修飾関係にあるものである。（23b）は A と B が意味的に主述関係を成すが，C が A の一部分で「A の C」（トウホクさんの姿）の修飾関係にある擬似関係節である。（23c）が連体節において主語を表す「の」である。（23b）は A と B が主述関係を成していると同時に，C が A の一部分であり，（23a）と（23c）の中間領域

にあるものと言える。ここで，(23a) と (23b) は，AとBの間の介在要素の有無や述語の種類やテンス・アスペクト表示がまったく問題にならないことに注目したい。(23a) と (23b) は同じく被修飾名詞Cが名詞句Aの一部分か所有関係にあり，AがCに直接係っていくものである。特に名詞句Aと連体形Bが意味上の主述関係を成している (23b) は，同じくAとBが主述関係を成している (23c) のような連体節とは違って，主語と述語の間の介在要素や述語の種類，脱テンス・アスペクト化のような制約がない。(23b) と (23c) の違いは，(23b) がAとBが意味上の主述関係を成していると同時に，名詞句Aが被修飾名詞Cにかかる統語構造を構成しているという点である。したがって，AとCに意味上の関係性が残されている場合には，状態性述語がもつ諸特徴は要求されないことがわかる。また，(23c) のような連体節にのみ状態性述語としての諸特徴が要求されるということは (23c) はAがCに直接係る関係が崩れており，名詞句Aが統語的に直接係るのはCではなく，述語連体形Bであることを意味している。現代日本語では「髪の長い。」で終止することは出来ず，「髪の長い女」のように被修飾名詞が必要であるが，「の」が直接関係しているのはBの連体形であり，その係り方が述語の種類や脱テンス・アスペクト化，AとBの間の介在要素がない，といった諸制約として現れるとみることができる。

次に，その係り方がなぜ，これまでにみてきた諸制約として現れるのかを問題とする。助詞「の」は，通常，名詞につながり，名詞を修飾するものである。本稿では，これを「の」が述語連体形の名詞的な性質に係ろうとするために生じる現象であると解釈したい。松下 (1928：484) では連体節で主語を表す「の」は名詞を修飾する「の」と同様に述語連体形の「体」に係ると説明し，この見方を最初に示しているが，本稿も松下 (1928) と同様の立場にたつ。松下の「連体」概念における「体」(「実体」とも) は，典型的には名詞の形をとって現れるとされる (1928：195)。助詞「の」は名詞に接続するが，しかし，名詞だけに限らず，「雨の降る日」のような連体節における「の」も述語連体形の「体」に係り，「の」は「作用の主体を事柄の属性として表すもの」(1928:483) であると説明している[17]。松下の指摘は連体節における助詞「の」と述語との関係に言及し，事態に対する捉え方に「の」が関わっていると論じている点で重要である。本稿の立場は，「の」が用いられる連体節の諸特徴によって導かれる認識である。

これまでに検討した述語連体形の特徴は，次のように整理される。①語彙概念として無行為・無変化・無時間の性質をもつ状態性述語のものであるほど，「の」の使用率が高く見られる。②述語連体形の形態が脱テンス・アスペクト化したものであるほど，「の」の使用率が高く見られる。③連体節内の述語は連用修飾成分の修飾を受けない—連体節内の主語と述語連体形の間には格成分の介在要素が見られない。述語が動詞の場合，副詞が介入する例も見られるが，ごくわずかである。形容詞述語の場合は主語名詞との間に介在要素がある例は見当たらない—。④連体節内部は主語と述語からなる構造を成している。⑤連体節内の主語は内項で，非対格構造の述語で構成される傾向にある。以上のような傾向は，名詞が述語になるときに現れる意味統語的特徴に対応する現象である[18]。状態性と関連する名詞の意味的性質として，時間軸における意味的特質から動詞や形容詞，名詞の語クラスを区別する概念に，Davidson (1980)，Jackendoff (1983)，

Givón (1984) 等において提示された時間的安定性 (Time Stability) という尺度がある。これによると，時間軸を越えて恒常的であり，変化の概念を持たず，時間的安定性の中で最上位に位置するものは言語において名詞として語彙化されやすいとされる。このことは，名詞が述語になる場合，例 (24) のように事態の頻度や様態の変化を表す副詞の修飾が受けられず，(25a, b) のようにそれ自体では時制形式とアスペクト形式を伴わないことからも確認される。

(24) *太郎は {たびたび／ゆっくり} 学生だ。

(25) a. *太郎は学生た。

b. *太郎は学生している。

(26) *太郎は {名前を／名前で／名前に／とても} 学生だ。

この制約は，名詞述語の意味的特質が時間軸上を越えて恒常的であり，それ自身はテンス・アスペクトの文法範疇とは無関係であるために起こるものである (上記①, ②に対応，以下同様)。また，名詞述語は，そもそも意図的な動作主による行為を表すものではなく，主語名詞句に対する外延の包含関係を表すものである。上記のような名詞の意味的な性質は，例 (26) のような統語的特徴と結びつき，名詞述語は，主語一項を必須項とし，副詞や格成分のような連用修飾成分を受けない (③, ④)。この点は，形容詞が比較を表す副詞の修飾を受け，動詞が主格以外の格成分や副詞の修飾を受けられるのと異なる制約である。名詞は時間軸上固定され，変化しないので，動作主や動作が行われる場所，動作の行為を受ける対象のような事態の構成要素を必要としない (③)。また，名詞述語を影山 (1999) の語彙概念構造，項構造から考えると，名詞述語の主語は，理論的には唯一項として外項でも内項でもあり得る。しかし，名詞述語は意図的な行為を成すわけではないので，主語は外項ではない。名詞述語は特定の開始時間や終了時間を超越した継続性をもつ状態 [BE] を表している。このことは，名詞述語が例 (25b) のように進行形をとらないことに表れている。名詞述語の主語は状態 [BE] の主語である点で，内項主語の意味的性質をもつと考えられ，佐川 (1996) が述べるように，名詞述語の性格はきわめて非対格動詞と似ており，形容詞と合わせて，非対格動詞の一種と考えていいと思われる (⑤) [19]。

以上，「の」の後に来る述語連体形の諸傾向は，名詞が述語になるときの特質によく対応する。名詞を品詞カテゴリーとしてではなく，名詞がもつ性質の総体と見た場合，「の」の後に来る「状態性述語」は「名詞」述語の性質に近似している。「の」は連体節で主語と述語を結ぶ述定の構造で現れるが，その内実は述語連体形の名詞のような性質に係る装定の関係にあると解釈できる。

5. おわりに

以上，主格助詞「の」が用いられる連体節の用例を分析し，「の」は連体節内の述語が「状態性述語」であることを示し，連体修飾部と被修飾名詞が状態・属性とその帰属対象の関係にあることを示すものと論じた。さらに，「の」の後に来る述語連体形の諸特徴 (①無行為・無変化・無時間の状態性述語，②形態が脱テンス・アスペクト化したもの，③連用修飾成分を受けない，④述定が主語・述語の構文構造，⑤主語と述語が非対格構造) は，「の」が述語連体形の名詞の

ような性質に係ろうとするために生じる現象であると論じた。「の」は述定の構造で表れるが，その内実は述語連体形と装定の関係を成している。大野(1978)，山田(2000)によると，古代語，室町期の資料でも述語が形容詞，非対格自動詞の場合は，「の」が多く使われているという記述が見られる。本稿の結果は，内省の効かない歴史的な日本語の変化を比較する際にも有効に働くと思われる。歴史的な考察は今後の課題である[20]。

注

1 これにより，「私が家を出ようとしているところで」のような文末助動詞化している例と「彼が行くという知らせ」のような述語に「という」が接続している例は対象外とした。これらの例には「の」が表れにくいことが指摘されている（前者：三上（1972），後者：井上（1976），于（2000））。なお，「行くのがいい人」のように主語に準体助詞「の」が後続している例は「の」の重複を避け「が」しか表れず，「～の言うとおり」「～の言うこと」のような出現頻度が高く「の」が使われる定型表現の例も除外した。また，「彼が考えるのは」のような節全体を準体助詞「の」で受けている例は用例数が多く，「魚の焼いたの」のような同格の「の」の問題とも絡んでいるので，除外した。

2 三上（1972）の分類では，ヲ格を取る「通る，飛ぶ」のような移動動詞は自動詞に分類される。

3 形容詞がもつこのような性質は，自動詞，他動詞の性質を考慮に入れて設定した。その際，ヤコブセン（1989：217）による日本語動詞の他動性に関する4つの意味要素（動作主と対象物の二つが関与すること，動作主の意図性，対象物の変化，現実の時間軸における変化であること）と，影山（1999，2001）の語彙概念構造における意味述語（状態，変化，活動等）を参考にした。本稿では形容詞がもつ性質は他動性の対極にある性質であると考える。

4 述語が他動詞の場合に「の」が用いられている用例には「記憶する」「持つ（所有するという意味で）」のような意図的な動作主を表さないものか，他動詞述語がとる形態で状態的な意味を焦点化している例が多い（注16）。典型的には非能格自動詞と同様に動作主による行為を表す他動詞が，非能格自動詞より「の」の使用率が少し高いのは，このようなことが起因していると考えられる。

5 状態を表すタ形とテイル形には，それぞれ(5)のような厳密には結果の状態を表す場合と(7)のような単純な状態を表す場合との両方が見られたが，「の」「が」の分布の違いに影響しなかったため，共に状態を表すものとしてまとめた。なお，(4)のような以前を表すタ形には，「私が差し出した十円銅貨四枚」（白15p）のような以前の動作を表す性格とそれによって生じた基準時の状態を含意する「完了」のニュアンスを帯びる例が含まれている（195例中20例）。しかし，このような例は動作主が明らかで，「さっき私が差し出した十円銅貨四枚」のように，時を表す成分の修飾を受けることができるため，以前の動作を表す側面が強く出ていると考え，以前のタ形としてまとめた。また，ル形には「火葬が始まること」（深27p）のような基準時より以後を表す用例も見られたが，用例数が少なく（38例），対象外とした（「の」5例，「が」33例）。なお，表3の各形態には「潜在意識では説明のできない証拠」（深38p），「タイミングが合わない感じ」（白9p）のような否定を伴う例（60例）が含まれている。これらの例を表3から省いても本節にみられる傾向はほぼ同じである。

6 形容詞現在形には「動物のお好きな方」（深50p），「空想力の豊かな学生」（白53p）のような形容動詞現在形が16例含まれている。

7　同時を表すル形には，「私が時たま立ち寄る酒場」（白 33p）のような繰りかえし行われる動作を表す例が含まれている（「の」3例，「が」42例）。これらは，述語動詞に「立ち寄る，申し出る，声をかける」のような動作性の強いものが来ている。これらを除くとル形の場合の「の」の使用率は 71.0％に上る。「恋」がル形で他の資料より「の」の使用率が低いのは，このような繰りかえしの動作を表す例の占める割合が高いためである。

8　動作性述語のル形は終止形（独立文）では未来を表すのが基本で，現在を表すのは特殊な場合に限られることが知られている（寺村 1984，高橋 1994 等）。

9　状態を表すテイル形がアスペクトを表すということは，「歌が載っているページ」が過去の状態であれば「歌が載っていたページ」のようにすることができるように＜現在⇔過去＞の対立を有するのに対して，「頬骨の突き出た顔」のような状態を表すタ形は状態を表す限りそのようなテンス的な対立がないことからもわかる（工藤 1983，高橋 1994）。

10　状態動詞は終止形の用法と共通である。状態動詞以外で，終止形にない連体修飾特有の用法だけでみると（風の吹く坂道→その坂道には風が吹いている），「の」が 69.0％（71 例中 49 例）の使用率を示す。ル形の中でも「が」の使用率が高い注 7 のような繰りかえし行われる動作は終止形の用法と共通である（時たま立ち寄る酒場→その酒場に時たま立ち寄る）。

11　形式名詞の種類は「こと，点，ところ，時，頃，場合，最中，あいだ，たび，様子，模様，位，分，うち」等。後述するように，井手（1967）は形式名詞を「範疇を規定する機能」を持つ語類とし，形式名詞と連体修飾部が結ぶ意味構造が通常の名詞とは違うことを示唆し，注目に値する規定を行っている。井手（1967）の規定が奥津（1974），寺村（1992）のような後の形式名詞論に連体修飾構造の視点という一定の方向性を与えたのは間違いない。ただし，井手（1967）の形式名詞論は，連体修飾構造の違いに徹していないところがあり，この点は，寺村（1992）の規定を取り入れて考察する。井手（1967）の形式名詞分類を用いることで，いわゆる形式名詞の中に現れる「の」の分布の違いが分かりやすいというメリットがある。

12　ただし，形容詞述語の場合は「内の関係」「外の関係」共に「の」の使用率が動詞述語の場合より高くみられ，述語が形容詞であれば，連体修飾構造の違いに関わらず動詞述語より「の」が現れやすい傾向を示している。しかし，述語が形容詞であることが「の」が現れやすい最適の構文環境ではないことも，「外の関係」の場合「の」の使用率が顕著に低下することに表れている。

13　「外の関係」にある場合に文性が高いということは，従来の研究において指摘されている述語に「という」が接続する場合「の」が現れにくい現象（注 1）とも連動していると考えられる。述語に接続する「という」は節の文としての性質を表示するものであり，寺村（1992）においても「外の関係」を図る一つの基準として用いられている。また，三上（1972）では文末の連体節における被修飾語の名詞性を判断する「ガノ可変」テストがある。例えば，「彼が来るはずだ」の「が」を「彼の来るはずだ」のように「の」に変えられないのは，被修飾語の「はず」の名詞性がくずれているためとみるものである。本稿の観点からすると，三上（1972）のいう文末に助動詞化したものが来る例は，述語と被修飾語が一体化し，既に文に相当する場合であり，「の」が表れにくいのは被修飾名詞の名詞性それ自体より，連体修飾部の述定性の高さと連動するものであると考えられる。

14　影山（1999，2001）の語彙概念構造は，動詞として言語化する際に統語的に意義のある意味特性の型を示したものである。BE は「状態」，BECOME は「変化」，ACT は「活動」，CAUSE は「使役」を表す。本文の x，y，z は変更で，実際の文では具体的な名詞に対応する。変更

zは［どこ，どのような状態］に当たる。

15 被修飾名詞が「人」の場合は「涙の跡の伝った頬」（恋 225p），「顎のしゃくれた細面の顔」（白 118p）のような，人の一部をなすものを含む。

16 述語が動作主を項としてもつ語類に「の」が用いられている場合（他動詞 60 例，非能格自動詞 8 例），「妻の使ったもの」（深 32p），「浅子のたてた花」（恋 83p）のように述語の形態がタ形で終わるものが 37 例見られる。また，「本人の記憶する前世時代」（深 38p），「裕子という女の持つどうしようもないもの」（星 203p）のような感情感覚や所有等の状態を表し，主語名詞に動作主としての性質がないものが 12 例で次に多い。動作主による行為を表す語類の場合「の」の後の述語がタ形を多くとるのは，タ形は事態がすでに終了し，終了した後の状態に注目が移りやすい形態で，行為を伴う述語であってもこの形態を伴うことで「の」の機能が適用されやすい条件を作ることができるためであろうと考えられる。上記例「妻の使ったもの」「浅子のたてた花」は「妻が使ったもの」「浅子がたてた花」と「が」を用いて表現することもでき，「の」と「が」は完全な相補分布を成しているわけではない。この場合，「の」でも「が」でも述語は「使った」「たてた」と一緒で本来の語彙概念としては動作主による行為を表すが，この時，動作主を背景化し，事態の結果状態を焦点化するためには「の」を用いて，述語が状態性述語の語彙概念として派生していることを示していると考えられる。

17 松下の論を追っていくと，用言の連体形にも「実体」があると考えており，彼の発想は「人の来るを待つ」のような，連体形がそれ自体で名詞として機能していた古語の知識が基にあるものと考えられる。最近では菊田（2002）が生成文法の理論的な立場から英語の動名詞に関する理論を援用し，「が／の交替」を名詞先行節の述語が名詞性をもつために起こるとする論を提示している。しかし，「の」の後の述語連体形は英語の動名詞とは違い，節の述語として現われるという根本的な違いがあり，そのようなことがない英語の動名詞と同じように考えていいかどうかは自明ではない。また，菊田（2002）では日本語の実際の現れ方との有機的な関連性と述語の部分については，十分な考察がなされていないように思われる。

18 日本語の「運動」「破壊」のような意図的な行為を表す漢語サ変動詞系のものは，動詞と名詞の両方の特性を有し，通常の名詞とは異なると考える（影山 1993，三宅 2000 参照）。

19 「の」の後に来る述語連体形が内項の主語と結合する傾向は，影山（1999）で指摘されている動詞由来名詞複合語にみられる制約に類似する。影山（1999）では，「肩こり」「胸騒ぎ」「子育て」のような動詞から由来する複合名詞の場合，動詞と組み合わせる要素は一つに限られ，その一つの要素は内項であるという制約があると指摘している。例えば，家で子供を育てるに対応する意味で「家子育て」ということはできず，動詞と複合される要素は一つに限られる。また，「子育て」は子が育てるのではなく，子を育てると解釈される。これは，内項だけが複合される制約による。影山(1999)では論じられていないが，このような制約が起きる原因は，本来動詞であるものが複合名詞という名詞の範疇に入った場合，他要素との複合の仕方が，名詞述語の特質を複写しているという可能性が考えられる。先述したように，名詞述語は内項主語に類似する意味的性質をもち，他の成分を受けない性質があり，このような性質は動詞における名詞的な性質の発現とも考えることができるのではないかと思われる。

20 金（2007）では，連体修飾構造における主格助詞「の」の使用がどのように変化してきたのかについて，中古語と現代語の連体修飾構造における主格助詞「の」の使用傾向を比較した。中古語の「の」連体節は「外の関係」の連体修飾構造が多く，「月のおもしろき夜」「かぐや姫の在る所」のような「内の関係」の連体修飾構造は被修飾名詞が特定の時間や場所を表す例で占

められていた。中古語の連体修飾構造で被修飾名詞が人や物の場合は，「女の髪長き」「紙の色深き」のような準体節の構文構造で現れる傾向にあることを観察し，「の」が用いられる現代語の連体節は準体法の用法の一部を引き継いできている可能性があると論じた。主格助詞「の」に関する通時的考察は，準体法を含む連体構造との関係をも視野に入れる必要があると思われる。

参考文献

井手至（1967）「形式名詞とは何か」『講座日本語の文法 3』, 37-52, 明治書院

井上和子（1976）『変形文法と日本語文法（上）』大修館書店

于振領（2000）「「という」が「ガノ交替」に与える影響について」『日本と中国ことばの梯　佐治圭三教授古稀記念論文集』, 121-136, くろしお出版

大島資生（1999）「現代語における主格の「の」について」『国語学』199, 149-161.

大野晋（1978）『日本語の文法を考える』岩波書店

奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』大修館書店

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎（1999）『形態論と意味』くろしお出版

影山太郎（2001）「自動詞と他動詞の交替」『日英対照　動詞の意味と構文』, 12-39, 大修館書店

菊田千春（2002）「が・の交替現象の非派生的分布―述語連体形の名詞性」『同志社大学英語英文学研究』74, 93-133.

金銀珠（2002）「助詞「の」の論理について―連体（修飾節）と存在概念との関わりから―」『名古屋大学日本語学研究室　過去・現在・未来』, 21-34, 名古屋大学大学院文学研究科

金銀珠（2007）「連体修飾構造における主格助詞「の」の変化―中古語と現代語との比較―」『HERSETEC テクスト布置の解釈学的研究と教育』1-2, 57-72, 名古屋大学大学院文学研究科

金水敏（1994）「連体修飾「～た」について」『日本語の名詞修飾表現』, 29-65, くろしお出版

工藤力男（1983）「連体用法の「た」の解釈」『岐阜大学国語国文学』16, 70-81.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房

佐川誠義（1996）「コピュラ構文と非対格の仮説」『言語学林 1995-1996』, 443-455, 三省堂

高橋太郎（1973）「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」（高橋（1994）所収）

高橋太郎（1974）「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」（高橋（1994）所収）

高橋太郎（1994）『動詞の研究―動詞の動詞らしさの発展と消失―』むぎ書房

寺村秀夫（1975-1978）「連体修飾のシンタクスと意味―その１～その４―」（寺村（1992）所収）

寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編―』くろしお出版

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

南部智史（2005）「コーパスを用いた「が／の」交替の数量的分析」『トークス』8, 83-106.

姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』紀元社

三上章（1972）『現代語法序説』くろしお出版

三宅知宏（2000）「名詞の『飽和性』について」『国文鶴見』35, 79-89.

ヤコブセン・ウェスリー M(1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』, 213-248, くろしお出版

山田昌裕（2000）「主語表示「が」と「の」—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較—」『立正大学国語国文』38, 9-20.
Davidson, Donald（1980）*Essays on actions and events*, Oxford: Oxford University Press.
Givón, Talmy（1984）*Syntax: a functional-typological introduction volume i*, Amsterdam: Philadelpha: John Benjamins.
Harada, Shinichi（1971）Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese, *Gengo Kenkyu* 60, 25-38.
Harada, Shinichi（1976）Ga-No Conversion Revisited—A Reply to Shibatani—, *Gengo Kenkyu* 70, 23-38.
Hiraiwa, Ken（1998）Nominative Genitive Conversion,Genitive Feature Checking,and a Theory of Verbal Inflection in Japanese—a Synchronic and Diachronic Syntax—, *Nihongo Nihonbunka Kenkyu* 8, 119-132, Osaka University of Froeign Studies.
Jackendoff, Ray（1983）*Semantics and cognition*, Cambridge:Mass: MIT Press.
Miyagawa, Shigeru(1993)Case-Checking and Minimal Link Condition, C. Phillips(ed.), *MIT Working Papers in Linguistics* 19, 213-254.
Ochi, Masao（2001）Move F and ga/no Conversion in Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247-286.
Watanabe, Akira（1996）Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: a Cross-Linguistic Perspective, *Journal of East Asian Linguistics* 4, 373-410.

付　記

本稿は名古屋大学大学院文学研究科平成18年度博士学位論文の一部を修正発展させたものである。本稿の執筆にあたり，名古屋大学日本語学研究室の釘貫亨先生，宮地朝子先生に多くの示唆をいただきました。投稿にあたっては，査読委員のみなさまから有益なご助言をいただきました。感謝申し上げます。

（投稿受理日：2008年6月3日）
（最終原稿受理日：2008年11月19日）

金　銀珠（きむ　うんじゅ）
名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEプログラム研究員
450-0001　名古屋市中村区那古野1-47-1　名古屋国際センタービル15F　名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEオフィス
kimeunju@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp

Japanese Linguistics 25 (April, 2009) 23-42 [Article]

The particle *no* in the modificational construction of modern Japanese

KIM Eunju
Nagoya University, Global COE Program

Keywords

stativity, nouniness, modification

Abstract

The present study 1) investigates the semantic and syntactic functions of the genitive subject marker *no* in contemporary Japanese and 2) accounts for the syntactic reason why the genitive subject marker *no* appears in subordinate clauses. Through examination of contemporary novels data, this paper reveals that, comparing it with the subjective marker *ga*, the genitive subject marker *no* has marked tendencies to appear in predicates and head nouns of subordinate clauses. Specifically, it turns out that predicates in subordinate clauses show parallel characteristics to noun predicates in copular sentences.

This paper argues that the genitive subject marker *no* serves as a marker which indicates the stativity of predicates, and that the predicate was derived as a stative structure. It is also argued that the genitive subject marker *no* modified the *nouniness* of a predicate, the standard usage of *no* as a modifier of nouns influences and thus restricts its usage as a modifier of predicates.